

令和3年度 第3回市政モニターアンケート

「電子書籍」の集計結果からの考察

電子書籍の認知度は高く、「扱いやすさ」から実用書としての需要が高い

電子書籍は読書媒体の一つとして浸透しており、利用環境も整ってきている。また、本のようにかさばらず手軽に読める、図書館に借りに行く手間が省ける、紙を使わずエコである、などの利便性も理解されている。

特に、移動中や外出先で使いやすい・携帯しやすいことにメリットを感じ、自宅や旅先でさっと読める料理や旅行などの実用書が、電子書籍として需要があることが伺える。

電子書籍は「実体がないことへの不安」と端末操作による「身体への負担」を生む

電子書籍はデータ化された書籍であるため、紙の本のように他人に貸し借りができないことや、大元のサービス提供が終了してしまうと今まで購入したデータがなくなり、本が読めなくなる可能性があること、物として手元に何も残らないことに不安を感じている。

スマホなどのタブレット端末を利用して読む時は、指で画面を操作してページをめくるため、内容が頭に残りにくいとの声がある。さらに、小さな画面で長時間の読書は、スマホ首や眼精疲労、視力低下など、健康への影響が懸念されることから、電子書籍利用へのハードルとなっていることが伺える。

図書館の本には「手に取る楽しさ」が満たされる紙媒体が求められる

本を手に取り、ページをめくりながらじっくり読むことができるのが、紙媒体の魅力である。単に本を読むだけでなく、紙の質感や装丁など、本全体を五感で楽しみながら読むことが読書の醍醐味だと考えているため、タブレット端末を利用した読書は、本を読んでいる感覚が得られにくく、物足りなさを感じる。

図書館の電子書籍導入についても、電子書籍サービスがあれば便利だと感じてはいるものの、紙媒体の書籍を減らしてまで導入してほしいとは思っていない。

読書の習慣がある人は、図書館に行って本を選ぶことに楽しさを見出しているため、実際に本に触れながら選べる方が、電子書籍よりも魅力を感じている。